

※取扱注意!

R13
く15
のみ使用

揺れるはざまのトラベラーズ

○主な登場人物

須和日向（すわひなた／十八歳）

…福島県八佐間村の高校三年生。最近父を病気で亡くす。

北原碧生（きたはらあおい／十七歳）

…東京世田谷区の高校三年生。本が好き。

須和芙美（すわふみ／四十四歳）

…日向の母。民宿すわを切り盛りする。

須和剛蔵（すわごうぞう／五十一歳）

…芙美の兄で、日向の伯父。八佐間神社の宮司。

能神久（のうがみひさし／三十五歳）

…民俗学を研究する大学准教授。神隠しについて研究している。

川井奈央（かわいなお／二十五歳）

…久の助手。

○場所

主に、福島県にある架空の村、八佐間村（はざまむら）。

○舞台

図書室エリアがある。これは異世界の図書室でもあり、後に小学校の図書室にもなる。このエリアは一段高い所にあり、その前のエリアは自由に場所を設定して使えるイメージ。また、民宿すわの大広間となるエリアもある。

○季節

二〇二五年五月。ようやく春の訪れを感じる頃。

プロローグ 十五少年漂流記

激しい嵐が吹き荒れている。

その船のメインマストは無惨に折れ、帆がだらしなくへばりついている。担い手のいない舵輪が海の意思に翻弄されるようにぐるぐると無造作に回転している。

波しぶきが甲板に容赦なく押し寄せ、今にもこの小型船をひっくり返さんばかりである。

須和日向（以下日向）、唐突に目を覚ます。

雨風と波でびしょ濡れである。寒さに震えながら辺りを見回し、自分が一体今どういう状況にあるのか確かめようとする。

日向 なんだ、これ……？

再び大きな波が甲板を襲う。

日向、波にさらわれて船から落ちそうになる。

そこへ北原碧生（以下碧生）、やって来る。

碧生 危ない！

碧生、日向を捕まえ、甲板に崩れ落ちる。

碧生、日向と同じくずぶ濡れである。日向を支えて立たせる。

碧生 気をつけろ！ ぼやっとしてると波に持ってかれるぞ！

日向 誰だお前？

碧生 そんなこといいから舵を取れ！

日向 舵？

碧生 あれだよ！

碧生、舵輪を指し、自身もそこへ向かって舵を取る。

日向、とりあえず碧生に従って自分も舵を取る。

日向 船操縦できんの？

碧生 できるわけないだろ。

日向 じゃあなんだよこれ！

碧生 分かんないよ！ とりあえず固定しないと。

日向 適当かよ。

碧生 ほっといたら転覆するよ、この船。

日向　なんで俺こんなとこいんの？　なんで船？　なんで海？
碧生　うるさいな！　黙っててよ！
日向　お前誰だよ！　どうなってんだよ！
碧生　僕にも分かんないよ！

そこへ最も年長の少年・ゴードン、やって来る。

ゴードン　（日向に向かって）船は大丈夫か？　ブリアン！

日向　ブリアン？　あんた誰？

ゴードン　何言ってるんだ、ゴードンだよ。（碧生に向かって）ドノバン、今だけはブリアンと協力してくれよ。

碧生　ドノバン？

ゴードン　（舞台袖を見て）危ない！　早く下へ降りるんだ！

日向　どうした？

ゴードン　子供たちが船室から顔を出したんだ。ちよつと下へ行って落ち着かせて来る。ブリアン、ドノバン、舵は頼んだよ！

ゴードン、船室へと去る。

日向　マジでわけわかんねえ……。

碧生　ブリアン、ゴードン、ドノバン……子供たち、嵐、折れたマスト……まさか……。

碧生、舵を離れて船尾を確認する。

日向　おい！　離れんなよ！

碧生　名板がない……。

日向　ないた？

碧生　この船の名前を書いた板だよ。はがれ落ちてる……。

日向　それがなんだよ！　早く戻って来いって！

碧生　これ、『十五少年漂流記』だ。

日向　じゅうご……なに？

碧生、急いで舵に戻る。

碧生　『十五少年漂流記』！　作者はジュール・ヴェルヌ。知らないの？

日向　知らない。

碧生　この船の名前はスルギ号だ。僕らは今南太平洋のど真ん中にいる。

日向　名板がないのになんで名前が分かるんだよ。

碧生 読んだことがあるからだよ！ この船は出航直後に大型船と接触する。そのせい

ではがれ落ちた名板だけが発見されて、沈没したと勘違いされるんだ。

日向 読んだことがある？

碧生 この船に乗ってるのはニュージブランドのチェアマン小学校の少年十四人、乗組員の少年が一人で合計十五人。

日向 だから？

碧生 だから、小説なの！ 僕たちは今、小説の中で遭難してるんだ！

日向 小説？ ウソだろ……？ これからどうなるんだ？

碧生 小説の通りなら、この後僕らは無人島に漂着する。

日向 じゃあ少なくとも死なないんだな？

碧生 そのはずだけど……。

日向、目の前を指差しながら、

日向 じゃあ、あのめちゃくちやデカイ波も、無事切り抜けるってことだよな……？

碧生 （波に気づいて）わかんない……。

日向 え！？

碧生 あれは書いてなかった……。

日向 ウソだろ！？

日向、碧生、悲鳴を上げながら、巨大な波に飲み込まれる。
オープニングへ。

第一場 シャーロック・ホームズの冒険

本が整然と並び、図書室のような場所。

日向、閲覧台の上で気を失っている。

その近くでは碧生が座って本を読んでいる。

日向、勢いよく目を覚ます。

日向　　うわっ！　わあっ！

日向、波を避ける仕草。しかし、自身が今海にいないことに気づく。

日向　　あれ……？

碧生　　（本を読みながら）もう大丈夫だよ。

日向　　波は？　海は？

碧生　　よく分かんないけど、今はここにいる。

日向　　（周囲を見回しながら）ここはなんだ？

碧生　　図書室じゃない？

日向　　それは見れば分かる。ここもあの……なんだっけ、十五少年……。

碧生　　『十五少年漂流記』。

日向　　そう、それ！　その中に出て来るの？

碧生　　もし小説の通りなら僕らは今頃無人島の海岸に乗り上げてるはずだ。こんな場所が出て来る記述はない。

日向　　どこの図書室なんだ？

碧生　　さあ。

日向　　まさか、天国……？

碧生　　かもね。船にいる前の記憶とつじつまも合うし。

日向　　つまり？

碧生　　図書館にいたんだ。で、電動式の移動棚に挟まれた。

日向　　電動式の移動棚？

碧生　　大学の図書館とかにあるんだよ。ボタンを押すと電動で移動する、大きな本棚あれか。（身振りを交えながら）くつついて、ボタン押すとガーンと移動して、本棚が出てくるやつ。

碧生　　（初めて日向の方を見て）よく知ってるね。

日向　　前に大学見学会で見た。

碧生　　大学見学会？

日向　　泊まりがけで大学をいくつか見に行くやつ。行ったことない？

碧生　　ない。（再び本を読みながら）でもおかしいんだよ、ああいう本棚って普通安全

装置があるのに。間に誰かいたら止まるはずなんだけど。

日向 お前はそれに挟まれて死んだの？

碧生 死んだかどうかは分からない。挟まれた所から記憶がないから。気がついたらあの船にいた。

日向 俺、あの船に乗る前の記憶がないんだよ。お前が死んだんだとしたら、俺も死んじゃってるのかな……？

碧生 お前ってやめてくれる？

日向 じゃあ、ドノバン？

碧生 それは『十五少年漂流記』の登場人物だから。それにしても、僕がドノバンなんて納得いかないよ。どっちかっていうとゴードンって感じだと思うけど。

日向 どっちでもいいだろ。名前は？

碧生 そっちから名乗るのが礼儀じゃない？

日向 めんどくせえな。須和日向、高三、よろしく。

碧生 北原碧生、高校三年生。

日向 タメか。

碧生 記憶がないって、どこから？

日向 とりあえずいつも通り学校行って終わってうち帰って、お客さんの夕食作って、俺と母さんの分も作って、そんでご飯食った後に……まあ色々あって家出てって、そこまでは覚えてんだよな。そこから気がついたらあの船にいたっていうか……。

碧生 (日向の方を見て) お客さん？

日向 うち民宿やってんだよ。食事は俺の担当。

碧生 意外。

日向 失礼だな。

碧生 色々って？

日向 まあ、色々。

碧生 色々じゃ分かんないから聞いてるんだろ？

日向 なんで会ったばっかのやつに俺のプライベート話さなきゃいけないんだよ。

碧生 僕らがなんでここに居るのか、ヒントになるかもしれないでしょ。

日向 そうかしんねえけど……。まあいいか。大したことじゃねえんだけどさ、ご飯食った後に母さんが……。

須和芙美 (以下芙美)、登場して来る。

場面は民宿すわの大広間へ。

芙美 日向、ちょっと座んなさい。

日向 なんだよ。

芙美 いいから。

日向、渋々大広間へ。芙美の前に座る。

日向

あんな、進路希望調査票出した？

日向

ああ……。

「ああ」じゃないでしょうが。

日向

なんで知ってんの？

日向

今日先生とスーパで会ったから。

芙美

だから嫌なんだよ、田舎は。

日向

「まだ」五月だと思ってる？ 「もう」五月だよ。

芙美

分かってるよ。

日向

ちよつと頑張んなきゃいけないレベルの所にしなさいね。ちゃんと四年間自分を磨き続けられるような、将来の役に立つような、そういう大学。ね？

日向

まあ……。

芙美

興味ある学部とかあるでしょ？

日向

あとは偏差値見て決めればいいだけの話じゃない。

日向

それなんだけどさ……。

芙美

なんだ、説教か？

日向

お兄ちゃんは黙ってて。

日向

日向、とりあえず謝っとけ。

日向

伯父さんは黙ってて。

日向

なんだよ二人して。

日向

あの子、俺、大学行くのやめようかなって。

日向

はあ？

日向

どうした急に。

芙美

だって、大学なんて行く意味ある？

日向

大学行かなくなったらってYouTubeでなんでも

学べる時代なわけだしさ、四年間無駄にするよりさっさと働いちゃった方がいい

芙美

っていうか……。

日向

大学行かないでどうすんの。

芙美

例えば、この民宿継ぐとか。

日向

お父さんが一言でもそんなこと言った？

日向

言っていないけど、

お父さんとの約束はどうなるの？

日向

お父さんはあんなに「大学に行け」って言ったの。

日向

父さんが一方的に言ったただけだし。

芙美 あんたも「分かった」って言ったじゃない。

日向 あの場で「行かない」とは言えないだろ。俺だって空気読むわ。

芙美 お父さんに嘘ついたの？

日向 嘘じゃないけどさ……。

芙美 嘘じゃない。

剛蔵 大学なんてお前、行っというて損はないだろ？

日向 お金かかんじゃん。

芙美 そういう心配はしなくていいの。

日向 父さんだってさ、自分が大学行けなかったから俺に行けっという、それだけのことだろ？ 別に俺のためじゃないでしょ。

芙美 違うよ！ 日向の将来のこと考えてさ……。

日向 少なくとも俺には、そう思えない。

芙美 日向。

日向 だって俺が何したいとか何が好きとか全然興味なかったじゃん、あの人。いっつも本ばっか読んでてさ。

剛蔵 日向、その言い方はないだろ。

日向 俺の将来は俺が決める。つーか、もう死んだ人との約束をなんで俺が嫌々守んなきゃいけないの？ 生きてる俺が犠牲になっくんじゃん。

芙美 日向！ お父さんに謝んなさい！

日向 いねえだろ、もう。

日向、立ち上がって去ろうとする。

芙美 どこ行くの？

日向 散歩。

日向、大広間を出て図書室へ戻る。

大広間、舞台が転換して消えていく。

碧生 つまり、お母さんとケンカして家を飛び出したと。

日向 ちげーよ。

碧生 今の話だとそういうことでしょ？

日向 もっと複雑なんだよ。

碧生 お父さん、亡くなったの？

日向 今年の一月に。ガンで。

碧生 そうなんだ。

碧生、再び本を読み始める。

日向

日向
碧生 「で」、って、何が？

日向
碧生 俺らがなんでここにいるのか分かった？

日向
碧生 いいや。

日向
碧生 なんだよ。何読んでんの？

日向
碧生 『十五少年漂流記』。久々に読んでみたいなと思って。ここの本棚にあったから。

日向
碧生 へえ。いや、ちょっと待って？

日向
碧生 なに？

日向
碧生 この辺見て回ったりした？

日向
碧生 どんな本があるかは見てみたけど。

日向
碧生 そうじゃなくて、ここから出られるか検証した？

日向
碧生 全然。

日向
碧生 じゃあお前、目え覚ましてすぐそれ読み始めたの？

日向
碧生 そうなるね。

日向
碧生 俺を起こして一緒に出口を探そうとか思わなかったのかよ。

日向
碧生 知らない人にあんまり関わりたくない。

日向
碧生 めちゃくちゃおかしいぞお前。

日向
碧生 そうかな。

日向
碧生 ちょっとは気になるだろうが。死後の世界かもしれないんだぞ？

日向
碧生 もしそうなら今さら何やっても遅いでしょ。

日向
碧生 変なやつに監禁されてる可能性だってあんだろ。

日向
碧生 そうかも。

日向
碧生 なんてお前はそんなに落ち着いてんだよ！

日向
碧生 僕だって戸惑ってるよ。

日向
碧生 そうは見えねえな。

日向
碧生 僕はともかく、君はもしかしたら何かしらの事故に遭って、そのあまりの衝撃に死んでしまった自覚がないのかもしれない。

日向
碧生 お前だって死んでるかもしれないんだぞ？ とにかく出口探さなきゃ。

日向、出口を探し始める。

碧生 オカルトでよくあるよね。自分が死んだって気づいてなくて地縛霊になっちゃうみたいなの。

日向、ドアを発見する。

日向
碧生 めちゃくちゃドアあんじゃん！
(ドアの方を見て) ほんとだ。

日向 もしお前が探してたらすぐ見つかったのに。
碧生 見つかったんだからいいじゃない。
日向 ちよつと行つて来るわ。外がどうなってんのか探してみる。
碧生 行つてらっしゃい。

日向、ドアを開けて図書室を出て行く。
碧生、それを見送ると、再び本を読み始める。
日向、反対側にある別のドアから出て来る。

日向 あれ？

日向、再び出てきたドアから外へ出る。
しかし最初に出たドアから再び戻つて来る。

碧生 出られそう？

日向 無理だわ。なんか変だぞここ。普通の空間じゃない。

碧生 じゃあしょうがないね。

日向 お前さあ……。

日向、言いながら碧生に歩み寄る。
碧生の手元に置いてあるメモを発見し、手に取る。

日向 これは？

碧生 この本に挟んであった。

日向 『十五少年漂流記』に？

碧生 うん。

日向 なんかのヒントかもしれないだろうが。

碧生 そうは思えないけど。

日向 (メモの内容を読む)「ブリアン、ドノバン、仲悪い、ブリアン助ける、共通の目的、絆」。なんだこれ。

碧生 後々そういう展開になるんだよ。ブリアンがドノバンを助けて、それをきつかけにいがみ合っていた二人が協力するようになる。

日向 だから？

碧生 だからって？

日向 なんでそれをわざわざメモって残すの？ つーか誰のメモだよこれ。

碧生 それは知らない。

日向 気にならないの？

碧生 あんまり。

日向 お前さあ、ここから一生出られなくてもいいの？

碧生 別にいいかな。本もたくさんあるし。

日向 マジで？

碧生 別に生きること何の未練もないっていうか。

日向 そんなわけないだろ。

碧生 それは君が決めることじゃないだろ。どうせ元いたところでも本ばっか読んでたんだ。ここでもやることは一緒だよ。

碧生、再び本を読み始める。

日向 信じらんねえ。俺はとにかく出口を探す。

日向、出口を探す。

しばらく探すが何も見つけれず、諦めて座り込む。

日向 なんか、お前見てつと父さん思い出すわ。暇さえありやずっと本読んでてさ。

碧生 そんな本読んでたの？

日向 なんか難しそうな小説ばっか読んでた。

碧生 それなのに君は『十五少年漂流記』も知らないわけ？

俺だって全く本読んでないわけじゃないからね。海外のをあんまり知らないだけ。

日向 いいお父さんだと思うけどね。うちの父親なんてビジネス書と自己啓発本しか読まないよ。

日向 いい父親ではないだろ。俺の話聞きもしねえで。

碧生 それは君がお父さんの読書中に話しかけるからじゃない？

日向 ほんとにずっと読んでんの。たまに息子に会う時くらい話せつつーんだよ。

碧生 そんなに話したかったんだ。

日向 別にそういうわけでもないけど。

碧生 たまに、つてことは、単身赴任？

日向 うち福島なんだけどさ、色々出稼ぎ行つてて。

碧生 出稼ぎって現代でもあるんだ。

日向 あるよ。

碧生 あれ？ 君、福島の人なの？

日向 そうだけど。八佐間村ってところ。お前は？

碧生 東京。

日向 東京！

碧生 世田谷。

日向 世田谷！ めっちゃ都会じゃん！

碧生 そうでもないけど。

日向 どうりでやなやつだと思ったわ。都会っ子じゃん。
碧生 なんで東京の僕と福島の君が同じ場所に……？（ふと気づいて）やなやつだと

思ってたの？

日向 うん。

碧生 じゃあお互い同じ印象だったってわけだ。

日向 は？ そうかよ。ムカつく。

碧生 本でも読んで落ち着きなよ。

日向 うっせえ。

しばし沈黙。

日向、手持ち無沙汰そうにしている。

碧生、気にせず本を読み続けている。

日向、ポケットを探ってスマートフォンを探す。

日向 まあ、スマホは？

碧生 ない。

日向 やっぱり？ 俺もねえんだよ。どっかに落として来たのかな。それともやっぱり

ここは天国だから持ち込めないとか、そういうルールなのかな。

違う違う、そうじゃなくて、元々持ってたない。

持ってたない？ スマホを？

日向 うん。

碧生 なんで？

日向 なんでって、必要ないから？

碧生 マジで！？

日向 だって必要ないだろ。高校生だよ？

碧生 高校生だからだろ！ 友達いないの？

日向 いないしいらない。

碧生 いじめられてる？

日向 られてません。

碧生 ゲームもSNSも一切やってない？

日向 やってない。

日向 ヤバ過ぎるんですけど！ 俺には無理。どうやって時間潰せばいいか全然分かんねえわ。

碧生 本読みなよ。

再び沈黙。

日向、手持ち無沙汰そうにしている。

碧生、気にせず本を読み続ける。

日向、立ち上がって辺りをぶらぶらし始める。
しばらくそうしているが、沈黙に耐えられなくなり、

日向　しりとりしない？

碧生　本読みなよ！

日向　気が進まねえな……。

碧生　なんか適当に探してあげるから、それ読んでおとなしくしてて。

碧生、本棚を探りながら、

碧生　短編の方が読みやすいよね。ジェフリー・アーチャーは難しいか。芥川龍之介……も難しいよね。

日向　芥川は読めるよ。『鼻』とか『羅生門』でしょ？

碧生　本嫌いなんじゃないの？

日向　本が嫌いなんじゃなくて本ばっか読んでる父親が嫌いだったの。あと海外のやつが苦手。

碧生　そうか。僕逆に海外のしか読まないなあ。

日向　言っとくけど俺、学校の成績は結構いいからね？

碧生　学校の成績「は」、いいのね。

日向　なんだその言い方。ムカつくな。

碧生　好きなジャンルとかないの？

日向　んー、サスペンスみたいなの？

碧生　じゃあミステリー読んでみる？ 『シャーロック・ホームズ』とか。

日向　さすがにホームズは知ってる。

碧生　じゃあ『シャーロック・ホームズの冒険』だね。最初にして最高の探偵小説だよ。

碧生、本を探し出して日向に手渡す。

日向　（本を見ながら）これは短編？　どれから読んでも大丈夫？

碧生　そうだね。

日向　じゃあ読んでみようかな……。

日向、本を開こうとするが、すぐにやめる。

碧生　どうしたの？

日向　これ、またさっきみたいなことにならないよな？

碧生　さっきみたいなことって？

日向　いきなり船の上にいたりとかさ。

碧生 どうかな。さっき他の本も読んでみたけど、何も起こらなかったよ。

日向 信用できないな。(本を見ながら) いきなり犯人に撃たれたりしないかな？

碧生 もしさっきみたいになっても大丈夫だよ、僕内容知ってるし。それに、シヤロック・ホームズの世界に入れるなんて最高じゃない。

日向 お前、まさかこの状況楽しんでないだろうな？

碧生 いいから読んでみなって。

日向、『赤毛組合』の掲載されたページを開く。

そこには先ほどと同じようなメモが挟んである。

日向 あれ、またメモだ。「ホームズ、ワトスン、コンビ。危機を乗り越える、ホームズとワトスンの友情」。

どこからともなくロンドンの喧騒と馬車の音が聞こえてくる。

日向 なんか聞こえる……。

碧生 これってもしかして……。

まばゆい光が二人を包む。

日向、碧生、悲鳴を上げ、姿を消す。

場面は民宿すわの大広間へ。

芙美、剛蔵、座っている。

能神久(以下久)、堂々とした様子で立っている。

川井奈央(以下奈央)、その近くに控える形で座っている。

久 ついに、恐れていたことが起こりましたね……。

短い沈黙。

芙美 ……恐れてたの？

久 ええ、恐れていました。いつかこんなことが起こるんじゃないかと。

剛蔵 いつかこんなことが起こるって思ってたのか？

久 ええ、思っていました。いつかこんなことが起こるんじゃないかと。

芙美 それってつまり、うちの日向がいきなりいなくなつて、丸一日経つても帰つて来

ないっていう、そういう事態をってこと？

久 具体的に言えばそういうことです。

剛蔵 予測してたってことか？

久 僕が一体何年この村の神隠し伝説を研究してると思ってるんですか。

芙美 まあ、専門家ですもんね。

奈央 確かに先生は恐れてらっしゃいました。いつかこんなことが起こるのではないかと。

芙美 そうなのね。

奈央 研究室でも毎日、「神隠し起こんねえかな、誰でもいいからいなくなんねえかな」と呟いてらっしゃいました。

芙美 待ち望んでるじゃない！

久 川井君！ シッ！

剛蔵 縁起でもねえぞお前！

久 誤解です！ 待ち望んでいたなんてそんな！ 単純に、サンプルが多ければ多い

剛蔵 ほど研究が進むなあと思っただけです！

久 待ち望んでるじゃねえか！

「だって仕方ないじゃないですか！ 平成に入って神隠しもめっきり減って、令和にいたってはまだ一回も起こってなかったんですよ！？」 僕がどれだけ神隠しを心待ちにしていたか！

剛蔵 知るか！

久 当然、日向君の一件はきちんと調査します。福名大学人文学部民俗学コース史上

最年少准教授の私、能神久が彼をまるっと見事に探し出して見せます。

わたくし、川井奈央も助手として微力ながらお力添えいたします。

芙美 お願いますよほんと。

奈央 しかし研究者としての血も同時に騒いでしまうのはいたしかたないこと、今回の事例もきっちりサンプルに加えさせていただきますことはどうかご容赦ください。

剛蔵 腹立つなあこいつ……。

奈央 ちなみに警察には届けてらっしゃいます？

芙美 うん、一応。捜索願は出しちゃいるけど、まだ一日しか経ってないし、ただの家の可能性もあるからって、あんまり一生懸命に探してくれてはいないというか……。

久 まあ警察の初期対応なんてそんなもんでしょね。

奈央 心当たりの場所がありますか？

芙美 クラスの仲良さそうな子たちには連絡したんだけどね。バスケット部の子とか。でもどこにもいなくて。

剛蔵 あいつ、友達が多いんだけどなあ。こういう時に頼らなそうなんだよな。迷惑かけるとか思ってたそう。

奈央 どこかに身を寄せているわけではなさそうってことですな。

芙美 だから即神隠しってわけじゃないけど、お兄ちゃんの前例もあるし……。

剛蔵 俺が神隠しに遭ったのもあいつと同じ年くらいの時だったからなあ。

奈央 可能性はゼロではないと。

久 とにかくこの一件で、神隠しに遭いやすい血筋があるという僕の仮説が証明されたと言っても過言じゃありませんね。

剛蔵 血筋なのかなあ。

久 芙美さんと剛蔵さんのひいひいおばあさん、そしてひいおじいさん、さらに剛蔵さん、そして今回の日向君。記録に残っているだけで須和家の人間が四人も神隠しに遭ってるわけですから。

芙美 神隠しに遭いやすい血筋ってなんなの？ って感じだけど。

久 この八佐間村は古来、神隠しに遭う少年少女が異様に多い村ではありますが、それでもこの数には特筆すべきものがあります。

剛蔵 そんなで、どこから手えつけんだ？

奈央 過去の神隠しから類似の事例をピックアップしますか？

久 いや、それよりも剛蔵さんが神隠しに遭った当時のことを調べる方が手っ取り早い。

剛蔵 そんなこと言ってもよ、俺は神隠しに遭ってた間のことは全然覚えてねえからな。ちゃんと思いつく出そうとしたことがないからじゃないですか？ 大体、今まで一度

だって剛蔵さんから当時のお話をちゃんと聞けたためしがないわけですから。

奈央 そうだったんですか？

芙美 そうなのよ、結局いつも酒盛りになっちゃって。

奈央 なんだかんだで調査はしてるのかと。

久 面目ない。

剛蔵 毎年来るのはそっちが目的なのかと思ってたわ。

久 断じて違います。今から三十五年前、つまり剛蔵さんが十六歳の時に神隠しに遭い、無事に戻って来たというその事実には、何かヒントがあるはずなんです。

剛蔵 かわいい甥っ子のためにひと肌脱ぐか。

芙美 早速始めます？

久 いや、その前に民宿すわの名物、源泉かけ流しの湯を堪能させていただきましょ。光晴さんにもお線香を上げさせてください。

芙美 ええ、どうぞどうぞ。その後に調査を？

久 いや、その後に腹ごしらえですね。

奈央 私、馬刺し食べるのすごく楽しみ。

芙美 本当に調査してくれます？

久、奈央、剛蔵、芙美、大広間の奥へ去る。

場面は転換して一八九〇年のロンドン。

碧生、鹿撃ち帽をかぶり、ステッキを持って登場。

その後ろからボーラーハットを被った日向が登場。